

「臨床検査データブック 1997-1998」

自治医学大学学長 高久 史麿 監修
 東海大学医学部長 黒川 清
 神戸大学教授 春日 雅人 編集
 東京大学助教授 北村 聖

大阪大学医学部第2内科

松 澤 佑 次

日常診療において、疾病の診断および病態の把握に臨床検査は不可欠であり、今日でも、最先端の医学研究から得られた成果を基盤に新しい臨床検査が次々と開発されているのは周知のとおりである。その結果、保険診療が認可された項目だけでも1,000種以上に達するとのことである。臨床の場においてはこの中から必要最小限の検査項目を選び、適切な組み合わせで効率の良い検査情報を得て診断を行うとともに、更に、より厳選した項目をマーカーとして病勢の経過観察や治療効果の判定を行っていかなければならない。

しかし現実には不必要に過剰な検査を行ったり、必ずしも意義を理解せず新しい検査に飛びつく傾向がみられ、ときには検査づけなどと非難を受ける。この背景としては、診断の過程や病態の把握において病歴や理学的所見などの基本的な情報を軽視しがちで、データ優先主義となり、しかもデータについても系統的に分析する習慣がついていないことが挙げられる。

このような問題を解決するためには臨床医が対応している症例の診断や病態の把握、更には治療効果の判定のために何を知らたいかの目的意識を明確にするとともに、それぞれの検査の臨床的意義と異常値の出るメカニズムをよく理解して、効率の良い組み合わせで必要最小限の検査をオーダーするトレーニングが必要となる。しかし、先に述べたように多数に上る現存の検査に加えて、次々と開発されていく新しい検査のすべてについて、臨床の現場で常に理解しておくことは不可能である。そのような背景の中で、最近「臨床検査データブック 1997-1998」が発刊された。本書はほぼすべての分野の項目を網羅しており、臨床検査の辞書とも言えるものである。しかもそれぞれの項目について、異常値の出るメカニズムと臨床的意義が簡潔にまとめられているため、患者の病態の把握に極めて有用である。本書の特徴は、異常の出る疾患をただ単に羅列しているのではなく、“Decision Level”という概念を強調しているこ

とであり、高頻度に異常の出る疾患と、異常の出る可能性のある疾患を分類したり、異常値の程度によって考えうる疾患を区別していることで、最近の医師が陥りやすいデジタル型の思考過程の防止に有効であると思われる。また各検査に要する採血量や、検査日数、検体保存日数など重要でありながら臨床医の疎い点についても記載されており大変実用的である。

本書は総論で、保険請求上の注意事項がわかりやすく解説されており、勤務医、特に教育病院で勤務する医師や研修医の最も弱い部分にも踏み込んだユニークな企画も盛り込まれている。ただ1つ欲を言えば、いわゆる検査づけなどを防ぐための医療経済学、各検査項目に要する費用、少なくとも保険点数も記載されてあれば完璧であったと思われ、改訂の際などに考慮していただければ幸いである。

● B6 頁528 図17 表67 1997
 定価(本体4,500円+税) 円400

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)